

2024年2月16日開催  
目白大学内部質保証  
外部評価委員会

2023（令和5）年度  
目白大学外部評価委員会 報告書

目白大学

# 目次

1. 本学の内部質保証と外部評価委員会について（趣旨） .....	3
2. 第2期外部評価委員会委員 .....	4
3. 外部評価委員会の設置、役割について（関連規程） .....	4
4. 2023年度外部評価委員会（通算4回目）開催概要 .....	5
4-1. 日程・場所（実施方法）・参加者 .....	5
4-2. 事前資料 .....	5
4-3. テーマについて .....	6
5. 議事概要 .....	6
5-1. 開会 .....	6
5-2. 論点1「本学のアドミッション・ポリシーと入学者選抜・入学前教育」 .....	7
5-3. 論点2「入学後の状況分析」 .....	9
5-4. 認証評価受審について .....	11
5-5. 閉会 .....	11
6. 事後評価について .....	11

6-1. 評価方法.....	11
6-2. 評価.....	12
6-2-1 論点1「本学のアドミSSION・ポリシーと入学者選抜・入学前教育」.....	12
6-2-2 論点2「入学後の状況分析」.....	17
7. 委員長総評.....	19
8. 2023年度（令和5年度）第4回外部評価委員会を実施して.....	20

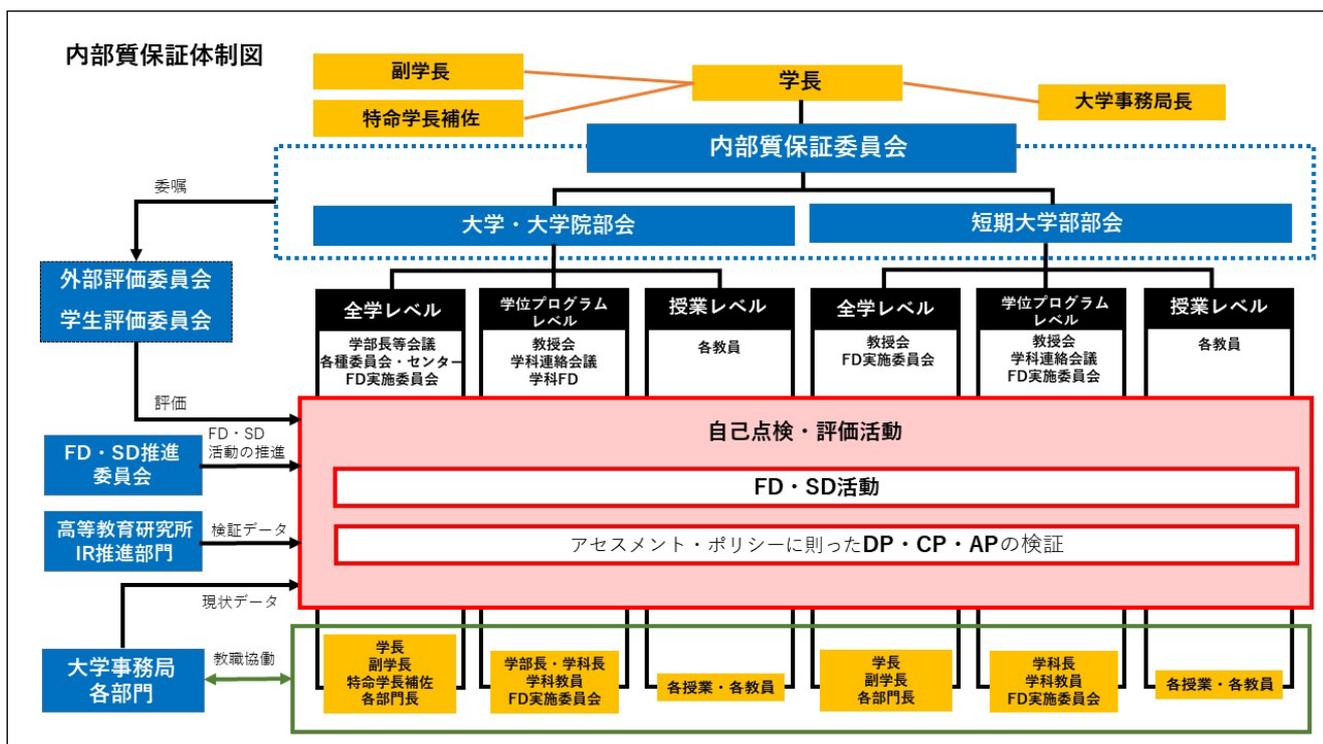
## 1. 本学の内部質保証と外部評価委員会について（趣旨）

本学の「教育の質の保証」については、1994年の開学当時より、体制を整備し、高等教育機関として質の向上に努めて参りました。2006年4月には、目白大学・目白大学短期大学部における自己点検・評価及び第三者評価等に関する規則を制定し、自己点検・評価等実施部会、第三者評価結果等検証部会及び短期大学部自己点検・評価等部会を設置し、組織的な教育活動の自己点検の体制強化を行いました。

2020年4月には、当該規則の改正、並びに目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程を新たに制定し、上記3部会を統合して、学長のリーダーシップのもと、評価・改善等を策定する委員会として、『内部質保証委員会』を設置し、大学における自主的な質保証への取組（内部質保証）体制を整えました。

『外部評価委員会』は目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程第4条の外部有識者から意見を得ながら、教育研究活動等の充実と向上、改善をすすめるために設置された組織であり、改善・改革に資する実質的な評価を行うことで、客観性と妥当性を担保し、本学の内部質保証体制の強化を目的としています。

図) 目白大学内部質保証の体制図



(推進体制)

第4条 学長は、前条に定める方針に従い内部質保証を推進するため、以下の組織を置く。

- (1) 大学全体として内部質保証の推進に責任を負う組織として内部質保証委員会（以下「本委員会」という。）を置く。
- (2) 自己点検・評価活動に基づく全学的な観点からの改善を推進するため、本委員会に部会を置く。
- (3) 本学の内部質保証について、本学関係者及び外部有識者から意見を得ながら、教育研究活動等の充実と向上、改善を進めるため、外部評価委員会及び、学生評価委員会を置く。

## 2. 第2期外部評価委員会委員

敬称略、肩書は2024年2月16日現在

職名	氏名	肩書	※1
委員長	山本 眞一	筑波大学・広島大学・桜美林大学 名誉教授	1号
委員	太田 康男	独立行政法人国立病院機構 東埼玉病院 病院長	2号
委員	竹村 智子	株式会社アプト 取締役	2号
委員	高橋 仁	新宿区総合政策部行政管理課長	3号
委員	鈴木 敬	2016年社会学部地域社会学科卒業	4号
委員	鈴木 彩加	2018年外国語学部中国語学科卒業	4号
委員	金子 賢	2012年看護学部看護学科卒業	4号

※1 目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程第12条の号に合致した者

## 3. 外部評価委員会の設置、役割について（関連規程）

（目白大学・目白大学短期大学部における内部質保証に関する規程第11条、第12条、第13条）

（外部評価委員会・学生評価委員会）

第11条 外部評価委員会及び学生評価委員会は、次に掲げる各号について、意見を聴取し、改善計画の策定に反映させるために開催する。

- （1）卒業認定・学位授与の方針（DP）、教育課程編成・実施の方針（CP）、入学者の受け入れの方針（AP）の各方針に基づく教育活動の評価及び改善に関する事項
- （2）その他本学の教育研究活動等全般に関する事項

（外部評価委員会の構成等）

第12条 外部評価委員会は、次の各号に掲げる者をもって構成する。

- （1）高等教育に関する見識を有する者
- （2）産業界に関する見識を有する者又は本学を卒業した者が勤務する企業等の関係者
- （3）本学の所在する地域の関係者又は本学が参画する地域連携活動の関係者
- （4）本学を卒業した者
- （5）その他学長が委嘱した者

2 委員は本学の運営に関する見識を考慮して学長が選考し、委嘱する。

3 外部評価委員会に委員長を置き、大学学長が指名する。

4 委員会には、学長が必要と認めるときは、委員以外の者を陪席させることができる。

5 外部評価委員会の庶務は、大学事務局大学企画室が行う。

（外部評価委員の任期）

第13条 外部評価委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

#### 4. 2023 年度外部評価委員会（通算 4 回目）開催概要

##### 4-1. 日程・場所（実施方法）・参加者

開催日	2024 年 2 月 16 日（金）	
時間	14：00～16：00	
場所	目白大学新宿キャンパス 8 号館地下 2 階会議室	
外部評価委員 出席者	山本 眞一	高等教育に精通した方
	太田 康男	産業界に関する見識を有する方
	竹村 智子	産業界に関する見識を有する方
	高橋 仁	地域連携活動関係の方
	鈴木 敬	卒業生（2016 年社会学部地域社会学科卒）
	鈴木 彩加	卒業生（2018 年外国語学部中国語学科卒）
	金子 賢	卒業生（2012 年看護学部看護学科卒）
目白大学 出席者	太原 孝英	学長
	今野 裕之	副学長（司会進行）
	土井 正	副学長
	堤 千鶴子	副学長
	鷺谷 正史	学務部長（入試担当）
	峯村 恒平	学長補佐（内部質保証担当）
	笠井 俊秀	大学事務局長
	鈴木 申明	大学事務局次長
	竹田 英司	入試広報部長
	岡 かおる	大学企画室長
	篠口 政司	大学企画室主任専門員
	池村 えみ	高等教育研究所 IR 推進部門長（内部質保証担当）

順不同、敬称略

##### 4-2. 事前資料

下記資料を 2024 年 1 月 19 日に外部評価委員へ送付し、2 月 8 日に追加資料を送付した。

<事前配布資料>

- ① 2023 年度外部評価委員会開催について（当資料）
- ② 各種資料の解説と評価ポイント

（本学のアドミッション・ポリシーと入学者選抜・入学前教育）

- ③ 本学のアドミッション・ポリシーと入学者選抜・入学前教育
- ④ 本学入学者選抜について
- ⑤ 過去 3 年間の入試結果
- ⑥ 大学全体の 3 方針について
- ⑦ 各学科ディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシー
- ⑧ アドミッション・ポリシーに基づく入学者選抜・入学前教育点検評価

（入学後の状況分析）

- ⑨ 入学後の状況分析
- ⑩ 入試種別別の学業成績と英語・国語アセスメントと入試種別別の状況
- ⑪ 新入生アンケート結果（抜粋）
- ⑫ 入学後の退学者数からみる入試種別

（参考資料）

- ⑬ 参考資料

- ⑭ 入学案内
- ⑮ 総合型選抜学生募集要項
- ⑯ 用語集

<追加発送資料>

追加④ 2011年～2023年度入学の入試志願者、入学者数一覧表

④ 前回送付資料の修正・正誤表と差し替え資料

#### 4-3. テーマについて

今回は下記のテーマを設定し、会議での説明、質疑応答の後、各評価委員による事後評価が行われた。

テーマ：「**本学の入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）と入学者選抜、入学前教育**」

論点1) 本学のアドミッション・ポリシーと入学者選抜・入学前教育

##### ■本学の概要報告と意見交換

- |                               |          |
|-------------------------------|----------|
| 1. 本学のディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシー | 資料⑤⑥     |
| 2. 入試状況報告                     | 資料③④・追加④ |
| 3. 入学前教育について                  | 資料⑦      |

##### ■評価の視点：

- ① 本学（各学科）のアドミッション・ポリシーは受験生に理解しやすいか。
- ② 本学（各学科）のアドミッション・ポリシーは多様な学生を受け入れるような内容になっているか。
- ③ 本学（各学科）のアドミッション・ポリシーはディプロマ・ポリシーとの整合性、一貫性があるものになっているか。
- ④ 本学の入試は本学が求める学生を見出すものになっているか。
- ⑤ 入学前教育は適切に行われているか。

論点2) 入学後の状況分析

##### ■本学の概要報告と意見交換

- |                             |     |
|-----------------------------|-----|
| 1. 入試種別別の学業成績と英語・国語アセスメント結果 | 資料⑧ |
| 2. 新入生アンケート結果               | 資料⑨ |
| 3. 退学者数からみる入試種別             | 資料⑩ |

##### ■評価の視点：

- ①入学後の状況から、本学の入試は、本学の求める学生を適切に見出せるものとなっていたか。

## 5. 議事概要

### 5-1. 開会

太原学長による開会の挨拶の後、本学外部評価委員会の趣旨が説明された。続いて、外部評価委員の皆様より、自己紹介をいただき、大学側出席者の自己紹介が行われた。次に、山本委員長長の進行により、テーマについて、論点を2つに分け、それぞれ大学担当者より説明後に質疑応答、意見交換を行い、最後に各委員より個別にコメントをいただく議事進行について説明があり、その後、討議に入った。

なお、本報告書では、説明項目別に本学担当者による説明と質疑応答での補足をまとめているため、実際の会議での発言順ではない。

## 5-2. 論点1「本学のアドミッション・ポリシーと入学者選抜・入学前教育」

### 1) 本学のディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシー

説明者：今野副学長

(参照資料は資料⑤⑥)

本学では、3方針＝ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）、アドミッション・ポリシー（入学者の受入れ方針）を定めている。全学のディプロマ・ポリシーでは、人材育成の目的と人間性、社会性、知力、健康、向上心の5つの要素から構成された全学共通の学士力を定めている。さらに、各学部・学科では、人材養成の目標と学修目標を明記し、それぞれの学科専門分野に関わる専門基礎力を定義している。学修目標は、本学で学ぶことで、どのような知識・理解、能力・技術、態度・志向性が身につくかを学科別に明記している。

このような学修目標を達成するために、どのような人材に入学して欲しいか示したものが、アドミッション・ポリシーである。本学では、全学科において、意欲、動機、基礎学力の3つで構成している。また、アドミッション・ポリシーの3つの側面のうち、どの側面に合致した人材を選抜しているか、総合型、推薦型、一般選抜等の各入試区分で異なっている。

なお、各学科のアドミッション・ポリシーが理解しやすいか、アドミッション・ポリシーに沿った選抜が出来ているか、各選抜での入学者は入学後どう成長したかについて、検証を行う予定である。

### ■質疑応答

Q) アドミッション・ポリシーのすべての項目を確認できる総合型と推薦型について、志願者を増やしている学科と減らしている学科がある。大学として、どう対応しているのか。

<本学の回答>

- ・ 受験生の年内受験志向の増加と、受験生に人気のある学科、不人気の学科が時代ごとにあるが、これまでの状況、全学や個々の学科の現状に合わせ、総合型を重視している学科や推薦型を重視する学科など、学科毎にメリハリをつけることで、大学全体としての志願者確保を目指している。

Q) 実際の選抜にあたり、アドミッション・ポリシーの確認をどのように行っているのか。

<本学の回答>

- ・ 各選抜方法、合否判定方法、アドミッション・ポリシーの整合性の確認は、2021年に全学科の状況調査を行った。その結果、総合型は各学科で様々な工夫をして選抜を行っていたが、判定方法については、チェックリストを作成して細かに学科内で統一された方法で選抜している学科もあれば、未整備の学科もある状態であった。入学者選抜結果の説明責任を果たすためにも、大学として判定方法のある程度標準化する必要があると考えている。
- ・ 総合型選抜の場合、ほとんどの志願者がオープンキャンパスに参加している現状から、オープンキャンパスで、アドミッション・ポリシーの説明を十分に行い、本学に適しているかを受験生自身が確認する機会を創出し、出願前にアドミッション・ポリシーの十分な理解を促している。

## 2) 入試状況報告

説明者：竹田入試広報部長  
(参照資料は資料③④・追加④)

本学では、多様な入試制度を用いて選抜を行っている。9月から12月には、総合型選抜（エントリーシートや面接を重視）、高校の評定平均を基準とした指定校推薦型及び公募推薦型選抜（小論文を課す）を行っており、これらを年内入試と称している。なお、ここ数年の傾向として、受験生の年内入試での受験志向が高まっている。年明け1月からは学力試験による選抜方法を行っており、本学独自の国語、英語等の筆記試験問題で選抜する全学部統一選抜及び一般選抜がある。また、(独)大学入試センターによる大学入学共通テストの結果を用いる共通テスト利用選抜も行っている。これらの学力試験の受験生は他大学を併願しているが、全学部統一と一般選抜A日程の学力試験の中でも早い時期の入試は本学への志望度が高いことを見越し、募集定員を多めに設定している。

2011年度から2023年度の志願者数、入学者数の推移では、2018年度、2020年度の志願者増の要因はメディア学部設置、心理学部設置といえる。志願者減少については、外的要因として、2016年度の東京23区の入学定員厳格化と2020年のコロナ禍により、受験生の安全志向から年内入試志願へシフトしていること、併願大学数を絞り込む受験生が多いことが考えられる。

### ■質疑応答

Q) (2021年度以降志願者が減少している) 志願者を増やすための取組について

<本学の回答>

- ・ 2018年から2020年の志願者増の要因は、学部新設のほかに外的要因として、2016年に入学定員厳格化（入学定員を超過した東京23区内の私立大学に対して、経常費補助金の配分基準を厳しくする政策）により、段階的に入学定員の管理が厳しくなり、その対策として、各私立大学は入学者を絞り込む動きにより、当時の受験生は集中的に23区内の大学を併願するという特殊な時代であったと考える。
- ・ 現在の本学の方針は、志願者増ではなく、本学を十分に理解した上で、入学を希望する学生を増やす、つまり、志望度合いの高い受験生を増やすことに尽力している。そのための取組は、本学を知ってもらうだけでなく、理解を深める広報活動を行っている。入試対策は、年内入試を重視した方針にシフトしている。そのため、併願する受験生が必然的に減少することから、志願者減は大学として覚悟している。また、受験生（高校生）自身も一般選抜から推薦型選抜での受験志望へ大きくシフトしている状況がある。なお、一般選抜での受験生に対しては本学の学びへの理解促進策として、SNSで学生生活をわかり易く情報発信することで入学後のギャップを起こさないような取組を行っている。

## 3) 入試前教育

説明者：鷺谷学務部長（入試担当）  
(参考資料は資料⑦)

本学では、全学科で入学前教育を展開している。具体的には、自宅学習（大学からの課題を学習する）と対面学習（キャンパスに来校して対面で実施する）の2つの組み合わせたプログラムを行っており、それぞれの学科の特色を反映させた内容となっている。自宅学習は、リメディアル教育（基礎学力を補う）と、高校から大学へのスムーズな学びの移行を目的とした学習があり、東進ハイスクールの通信教材を採用している学科や課題図書を提示する学科がある。なお、学習成果を測る確認テストを行う学科や対面学習時に自宅学習のフォローを行う学科も

ある。また、自宅学習は学習習慣があまり身につけていない学生を入学前に確認できる機会にもなっている。対面学習では、人間関係の構築がメインであり、キャンパスツアーや先輩講話、グループワークを中心に実施している。

なお、入学前教育の課題は、対面学習によって、年内入試の入学者同士の人間関係が入学前に構築されるため、一般選抜や共通テスト利用など、1月以降の入試の入学予定者からは、疎外感があるという声も上がっている点と、提示された自宅学習を行わない学生への対応であり、今後も大学として不断の改善を行っていく。

## ■質疑応答

Q) 保健医療学部と看護学部の入学前教育で、学力試験（一般選抜や共通テスト利用等）の入学予定者の受講率が低い点について

<本学の回答>

- ・ 入学前教育は、本学の方針で、主として全学科で年内入試（総合型、推薦型）での入学者、すなわち早期に入学が決まった学生に対し、継続して学習をする機会の創出として行っている。なお、学力試験型の学生も対象にしている保健医療学部や看護学部は、国語・英語・数学または生物を取り上げており、自分の弱い教科を補うスタイルとなっているが、取り組める期間が少ないこと、有料であること、希望制であることから、意欲が低い傾向にあると考えられる。

Q) 入学予定者の基礎学力向上のために入学前教育は重要と考えられるが、入学前教育を充実させる対策は何か行っているか。

<本学の回答>

- ・ 2024年度から学内の学長補佐を中心に、入学前教育、入学直後のオリエンテーション・フレッシュマンセミナーの研修、初年次教育の検証と改善を行う計画である。

Q) 入学前教育が機能しているか、学内で検証を行っているか

<本学の回答>

- ・ 基礎学力の向上（リメディアル教育）を目指して入学前教育を行っている学科は、取り組む前・後でテストを行っており、学習成果の検証を行っている。対面学習は、新入生アンケートの結果から一定の効果が見られる。

## 5-3. 論点2「入学後の状況分析」

### 1) 入試種別別の学業成績と英語・国語アセスメント結果

説明者：峯村学長補佐（内部質保証担当）  
（参考資料は資料⑧）

入試種別別入学者の1年生春学期授業の成績について、GPAの平均を比較すると、全学平均で推薦型選抜の入学者が一番高い傾向にある。しかし、さいたま岩槻キャンパスの各学科を個別に検証すると一般/共通テスト利用のGPAが高いが、当該テストの入学者数（分母）が極端に少ないため、当該キャンパスの平均点は推薦型と同程度になる。英語のテストでは、本学で導入している入学時のTOEIC Bridgeの結果（当該資料ではTOEICに換算）によると、全学平均では、一般/共通テスト利用の得点が一番高く、総合型が一番低い得点であることから、英語力

は学力試験で入学した学生が高いことになる。国語のテストでは、「日本語運用能力試験」を導入しており、全学平均では英語のテストと同様、一般/共通テスト利用が一番高い得点率であった。

最後に学年学期ごとのGPA推移では、現4年生はどの入試形態も2年、3年は低くなる傾向にあるが、いずれの学年学期においても推薦型が他の入試よりも高い傾向であり、その次に一般/共通テスト利用、総合型となっている。また、2023年3月に卒業した2019年入学生の学年学期ごとのGPA推移では、現4年生と同様に推薦型で入学した学生のGPAがいずれの時期も高い傾向であった。

## 2) 新入生アンケート結果について

説明者：峯村学長補佐（内部質保証担当）  
（参考資料は資料⑨㉞）

2023年4月に行った新入生アンケート結果（回答率94.5%）から、本学の志望動機と志望状況について報告する。まず、本学を知ったきっかけは、総合型・推薦型で入学した学生は本学オープンキャンパスが最も多い。それに対し、学力入試（一般/総合/全学統一）で入学した学生は塾・予備校の先生の紹介が多い。また、オープンキャンパス参加状況は、総合型・推薦型の学生が8・9割の学生が1回以上参加しているのに対し、学力入試の学生は8割以上がオープンキャンパスに参加していない状況であり、総合型・推薦型と比較し、本学の学びへの説明機会が確保できていないといえる。続いて受験を決めた時期では、総合型・推薦型は高校3年生の7月から9月には受験を決めているが、学力入試の場合は、高校3年生の10月から12月、あるいは1月に受験を決める傾向にある。志望順位は、総合型・推薦型の8割は第一希望であるが、学力試験での入学者のうち、第一希望は4名に一人もしくはそれより少ない傾向である。大学生活での不安要素では、入学前教育を実施している総合型・推薦型は友人に対する不安が学力試験での入学者と比較してやや少ない傾向にあるが、適性に関しては学力試験での入学者より不安に思っている学生が多い傾向である。大学でどんなこと学ぶか、4年間の学びのイメージでは、総合型・推薦型の学生は学力試験の学生よりイメージを持っている傾向にある。

## 3) 退学者数からみる入試種別

説明者：池村 IR 推進部門長（内部質保証担当）  
（参照資料は資料⑩）

各学科の全入学者のうち年内入試の比率を入学年度別にグラフにした結果であり、学力試験での入学者数確保を重視している学科、早い段階から年内入試で入学者確保を行っている学科が読み取れる。また、ほとんどの学科で、年を経るごとに推薦型の入学者確保を重視している傾向が読み取れる。学科別の入試種別別の退学率では、どの学科も推薦型で入学した学生の退学率は低いことがわかる。また全体的に退学率が低い学科もあり、学科によって差があり、退学率の低い学科は学生指導が行き届くと考えられる。また、学力試験で入学した学生の退学率が高い傾向にあるのは、オープンキャンパスに参加していない、入学前教育を経験していない学生がほとんどであるため、本学への理解不足もしくは不本意で入学した可能性がある。総合型での学生の退学の要因は、学力のミスマッチ、ディプロマ・ポリシー及びアドミッション・ポリシーの理解不足や選抜で合致していない点が予想される。退学時期については、1年秋学期・2年生春学期に退学の意思を示した率が高い。早期に退学を決意する学生が多いことは、本学の喫緊の課題と捉え、2022年度より「第3次中退防止プロジェクト」を開始し全学方針として初年次教育の強化など、中途退学者を減らす対策を行っているところである。

## ■質疑応答

Q) 退学防止にあたり、退学理由は調査しているか、また大学ではどのように学生と向き合っているのか

<本学の回答>

- ・ 退学届けに体調不良、進路変更などの理由を記載している。
- ・ 特に、学習意欲の低下による退学の防止策として、出席不良の学生を早期に抽出するシステムや、成績不振の学生とは面談を行う体制を整備し、大学として組織的に対応している。
- ・ 今は教員が「教える」ではなく、入学した学生へ、「大学でどんなことを学ぶのか、どう学ぶのか、どうやって学ぶのか」を教員が導く必要がある。また、明確なビジョンがなく大学へ入学する学生も多い。そのような学生に対し、どのように将来を描き、何が足りないのか、何を勉強するのか、を導く大学でありたいと考えている。
- ・ 国家資格取得を目指す学科でも、どんな資格なのか、どのような将来なのかを理解してもらい必要があり、オープンキャンパスで十分に将来について説明して、受験生に視野を広げてもらいたいと考えている。
- ・ 大学にとって中途退学を防止するのは、大学としての社会的義務と考えている。

### 5-4. 認証評価受審について

今野副学長より、2023年10月に公益財団法人日本高等教育評価機構の機関別認証評価を受審したことが報告された。受審にあたっては、本学からの詳細な報告書を基に、書類審査と実地調査での質疑応答を経て、評価されるものである。その際、優れた点として、丁寧なキャリア教育を行っていること、授業改善の取組、学生の主体性を持たす取組、副専攻の開設が評価された。一方、改善を要する点として、一部の学科の定員充足率の低い点、一部の学科で必要専任教員数は満たしているが教授数未充足の点で指摘を受けたが、いずれも本年度中に改善がみられ、最終的に「適合」という判定になる予定であり、引き続き評価結果を踏まえ改善を図ることが報告された。

### 5-5. 閉会

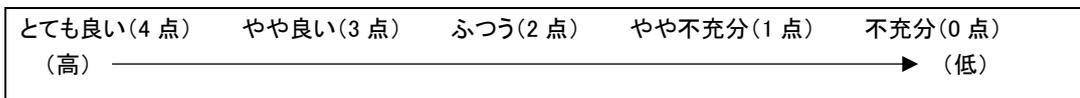
全委員一人一人より、全体の感想が述べられた。続いて、山本委員長に総評をいただいた後、太原学長より謝辞を申し上げ、委員会は閉会となった。

## 6. 事後評価について

委員会終了後、事後評価として、全委員へ視点ごとの「評価」、「良い点」、「改善を要する点」、「全体を通してのご意見」をいただいた。実施期間は2024年2月26日から3月15日とした。

### 6-1. 評価方法

評価にあたっては、各資料、委員会当日の説明と質疑応答を基に、5つの評価の視点で各委員に事後評価をいただいた。評価得点は下記の通りである。本報告書作成にあたっては、全評価委員の評価得点の平均点(最大4点)を記載と、それぞれの視点毎に「良い点」(「評価できる点」と修正)、「改善を要する点」で自由に記述いただいたものと、全体を通してのご意見を自由に記載いただいたものを簡略して記載する。



## 6-2. 評価

### 6-2-1 論点1「本学のアドミッション・ポリシーと入学者選抜・入学前教育」

#### 1) 評価の視点①

アドミッション・ポリシーは受験生に理解しやすいか	2.85点/4点
--------------------------	----------

#### 【評価できる点】

- ・ 入学を志願する者に必要な要件を、手際よく記述している。
- ・ 基礎学力を持つことや学びの意欲を持つことは学生にとっての最初に行うべき最も重要なことがらであり、明記されている。
- ・ 概ね受験生に理解しやすいアドミッション・ポリシーになっている。
- ・ 学部、学科毎に受け入れたい学生像をわかりやすい言葉で明文化されている。
- ・ アドミッション・ポリシーを学生が確認する材料の一つにパンフレットがあるが、各外部の最初のページに記載されているのが目に入りやすくなっている。
- ・ 内容はわかりやすく、どのような学生を求めているのかイメージはしやすい。特に、保護者には理解しやすい。
- ・ 学部・学科ごとにアドミッション・ポリシーを設定していることによって、受験生にとって、大学が求める人材像がわかりやすい。

#### 【改善を要する点】

- ・ 「学士力」という用語は、業界用語の一つであり、受験生に理解可能かどうかについては再検討の余地がある。学士力とは何かということもさらに説明しておくことが重要ではないか。
- ・ 一部の学科では、アドミッション・ポリシーから大学で学ぶ内容を想起しにくいものがある。
- ・ 他大学のものとも比較して、一般的なものと感じる。
- ・ 高校生目線からすると、「留学ができる」「〇〇の資格が取れる」「将来〇〇の仕事に就ける」「メディアを活用した高度で実践的な表現力を身に着きたい」など、未来像が明確な表記のものが、わかりやすく、さらに高校生には、よい動機付けにつながる。
- ・ アドミッション・ポリシーは、高校生に対して①「何をこの大学・学部で求めるか」、②「そのためには、大学で貪欲に取り組んでもらわないとならない」が、③「それができる能力・資質があるか」、以上の①から③の整理である。総合型選抜の入学者が多い現状を踏まえると、基礎学力を中心とした③よりも、①を測ることが入試の中心になる。その場合、①はより具体的に「4年間でこんなことをやりたい人を募集します」とすることにより高校生には明確に伝わると考える。
- ・ 「好奇心旺盛な人」「強い関心のある人」「前向きな姿勢のある人」などの表記は、他大学や他学科との差別化が難しい。
- ・ 総合型選抜の受験生に対しては、アドミッション・ポリシーの理解させる機会はあると思うが、それ以外の受験方式の受験生に対して、アドミッション・ポリシーを理解・浸透させる工夫を検討する必要がある。
- ・ 一部の学科には、「このような能力がある人」の表記がない点は補う必要がある。
- ・ 受験生（高校生）がアドミッション・ポリシーをどこまで理解し受験しているか、疑問が残る。まずはアドミッション・ポリシーを読んでもらえるような方法を再検討する必要がある。
- ・ 受験生（高校生）が自ら進んでアドミッション・ポリシーを確認するために、オープンキ

キャンパスなど直接の交流を増やし、文字で確認するより“体感させる”ことで理解を促進する必要がある。

## 2) 評価の視点②

アドミッション・ポリシーは多様な学生を受け入れるような内容になっているか。	3.00 点/4 点
---------------------------------------	------------

### 【評価できる点】

- ・ 「受験生の能力や適性を多面的に評価」、「多面的な背景を他者と協働」などの文言はそれを表現するような内容になっている。
- ・ アドミッション・ポリシーは多様な学生を受け入れるものになっている。
- ・ 特に資格職を目指す学科の表記は適切である。
- ・ 児童教育学科の表記には「将来これを活用して人とかかわることを通して社会の発展に貢献」とあり、将来の選択肢が教員だけではない点は高校生には選択肢が広いと感じる。将来の選択肢の幅が広いことも、大学という存在の魅力である。
- ・ 十分な内容になっていると評価できる。特に、総合型で入学を目指す受験生にとってはミスマッチを防ぎ、本当にやりたいことなのか否かを事前に確認することができる。
- ・ 基本的な知識の習得だけでなく、文化や習慣などあらゆる可能性の成長が見込める内容になっている。
- ・ 多様性が重視される現代において、学生にとって様々な受入方法があることは有効的である。大学にとっても受け皿を広くして優秀な学生確保のためには多様なアドミッション・ポリシーにより、幅広い多様な志願者が増えることは大学として適切である。

### 【改善を要する点】

- ・ さまざまな入学者選抜方法が用意されているが、入試選抜ごとに、どのような学生を入学させたいのかをアドミッション・ポリシーとして明記するとより効果的である。
- ・ 社会科学系の学科は、どの大学でもポリシーが明確に表現されていない。社会情報学科は、パンフレットでは興味深く、授業の楽しさは伝わってくるが、多様であるが上に、学科の特性が伝わりづらく、表現の工夫が必要である。
- ・ 多様な学生を受け入れるための文言であるため、少し抽象的な表現が多い。「積極的な姿勢」「基本的な・・・」などの表現は、もう少し具体で表現されているとより効果的である。
- ・ 現代は多様性を求められる時代であるが、多様性を「誰でも・何でも」と捉えるとアドミッション・ポリシーがぼやけてしまい、入学後、大学側と学生側の目指す方向にずれが生じてしまう可能性があるため十分に考慮する必要がある。
- ・ 総合型・推薦型以外の受験方式では、アドミッション・ポリシーの一部の視点でしか評価できないため、受験生へ在学中のカリキュラムにおける育成の考え方を示すことで、多様な学生の受け入れにつながる。
- ・ 求める人材と、本学を選んでほしい人材が異なる場合の整合性を持たせるのは非常に難しいと考える。

## 3) 評価の視点③

アドミッション・ポリシーはディプロマ・ポリシーと整合性、一貫性があるか	2.71 点/4 点
-------------------------------------	------------

### 【評価できる点】

- ・ ディプロマ・ポリシーは目白大学の教育目的を踏まえて、これを敷衍するものであり、教

育方針を学生に対して具体的に説明する極めて重要な宣言である。アドミッション・ポリシーは、このディプロマ・ポリシーに沿って学生が達成可能かどうかを、入学選抜時に判断するものとして書かれており、整合性や一貫性についてはよくとれている。

- ・ アドミッション・ポリシーはディプロマ・ポリシーと整合性、一貫性が概ね認められる。
- ・ ディプロマ・ポリシーに「知識・理解」「能力」「態度・志向性」で分け明記されており、そこに沿ったアドミッション・ポリシーを提示されている。
- ・ ディプロマ・ポリシーでは入学から卒業までの方向性（道のり）のイメージがつけられる内容ではある。
- ・ 学部・学科ごとにスタートとゴールの設定が明確となっている。

#### 【改善を要する点】

- ・ ディプロマ・ポリシーとしては申し分ないが、これを実現するためのプロセスについては、別途さまざまな機会に学生や教職員が情報共有できるよう、工夫することに期待する。
- ・ 教育基本法は極めて重要な法規であり、大学の具体的設置根拠は学校教育法にあるので、このことについてどこかで言及しておくとなお良い。
- ・ ディプロマ・ポリシーは、卒業時に「こういう大人に育てます」という大学側の宣言であり、約束だとすると、卒業時あるいは社会に出てからアセスメントを行うことが望ましい。
- ・ 大学側と学生側で将来目指す先は同じである事で、入学後のギャップを減らす事が見込める。その為、アドミッション・ポリシーは将来どのような人物になって欲しいという人物像と学んだことをどう生かして欲しいかまで明記すべきである。
- ・ より具体性（道のりから見える景色）のある内容があると良いのではないかと。（ポリシー毎に分けて読むより、並べて読んだ方が関連性の理解を促進できる。）
- ・ より一貫性のある内容だとさらに良い。
- ・ 設定した各ポリシーが学生にどのように浸透させていくかが、今後の課題と考える。

#### 4) 評価の視点④

<b>本学の入試は本学が求める学生を見出すものになっているか</b>	<b>2.85 点/4 点</b>
------------------------------------	-------------------

#### 【評価できる点】

- ・ 総合型選抜、学校推薦型選抜、全学部統一選抜、一般選抜、大学入学共通テスト利用型選抜というさまざまな方法で入学者選抜を行い、その選抜方法に結びつけられた適任の学生を見出そうとする姿勢が見られる。
- ・ 様々な選抜方法を用いて入学試験を実施していることは、多様性の確保に貢献していると考えられる。
- ・ 様々な選抜方式を活用することで、求める学生を発掘につながっている。
- ・ ある程度の論理的思考力、書く力を評価する小論文を導入されており、適切である。
- ・ 目白大学の特色である同じ学部の中でも異なる専門を学べる環境下において学科選びに悩んでも、アドミッション・ポリシーやディプロマ・ポリシーが一つの指針となり、ミスマッチが起きにくい設計になっている。
- ・ 個別面談を取り入れた入試は、大学と志願者の意思が直接確認する場になり、Web やエントリーシートだけでは見えてこない人間性も確認出来る試験として評価できる。
- ・ 幅の広い学生の受け入れのためには多様な入試方法がある事は有用であり、アドミッション・ポリシーに基づいた学生の受験につながる。

#### 【改善を要する点】

- ・ 資料⑦によれば、本来募集人員の少ない推薦型入学者選抜により、結果として多くの学生

を入学させていることが分かる。適任の学生を集めるのに支障がなければよいが、当初の意図と異なる結果であるならば、アドミッション・ポリシーに照らして募集区分ごとの選抜人数を確保するか、または募集区分ごとの人数を変えるなどして、アドミッション・ポリシーの実現に齟齬のないようにする必要がある。

- 一部の学科では、特定の入試選抜方法（特に全学部統一、共通テスト利用）からの入学者数が極めて少ない。多様性の確保の見地から、どの選抜方法でも一定数の入学者数は確保したい。あるいは全学部統一、共通テスト利用の入学者の特性は、一般入試選抜者のそれとほぼ重なることから、入学試験の効率性を重視するのであれば、その当該学科ではこれらを廃止するという考え方もある。
- 学力的に優秀な高校生が一般入試を受験して、単純に偏差値と合否だけで入学するが、その学生は、そもそも「力」がある学生も多いので、どのように目白大学の学びの特色を伝えるか、引き続きご検討いただきたい。
- それぞれのアドミッション・ポリシーに対してどんな方法で確認しているかを明確に示し、選抜の際の判断基準を曖昧にしないようにすることを期待する。
- 全体的な志願者数・入学者数の推移や、学部・学科別・入試種別による推移を分析した上で、学部・学科ごとにおける入試種別ごとの合格枠数を検討する必要がある。
- 受験料収入を重視していないのであれば、共通テスト利用の志願者が少ないことから、実施を見直すことも必要ではないか。また、推薦型へ募集をシフトしていくことは、データから見ても、アドミッション・ポリシーに合致している学生が確保できるのではないか。

## 5) 評価の視点⑤

入学前教育は適切に行われているか	2.42点/4点
------------------	----------

### 【評価できる点】

- 近年の高校教育の現状や入学者の学力・意欲等に照らして、ディプロマ・ポリシーの実現をより容易にするために必要なプロセスだとすれば、入学前教育は必要なことだと判断される。
- 入学前教育の実施には教員へ多大な負荷がかかるが、それを実施していることに敬意を表する。
- 推薦入学者に対しては、十分な成果をあげているのではないかと考えられる。
- 心理カウンセリング学科が、読む力、書く力の醸成を行っていること、子ども学科のレイチェル・カーソンの課題図書感想文は大学生として、しっかり考えさせる題材を選んでいる。高校入試の問題を解く、大学のトリセツも、入学前教育として評価できる。
- 対面型選抜の入学前教育は交友関係を築き、学びの第一歩となる事前セミナーはとても有効である。
- 入学前教育の自宅学習の課題は入学者が入学後の授業に取り組む意識を前向きにする内容である。また、対面学習により、入学前に先生方や同級生との交流があることは、不安を緩和させる良い取組であり評価できる。
- 入学前教育の本来の目的以外の効果として、入学前の受験生同士の交流につながっている。
- 教材を使用し、総合型や推薦型で受験した学生の基礎学力の維持向上が図れるように対策がされている。
- 対面でのフォローアップや学生同士の関わりが持てる研修は、入学直後の精神面での安定が保たれ、有効性が高い。

### 【改善を要する点】

- 入学前教育の目的・趣旨に鑑み、対象外学生にどのような教育サービスを行うべきかにつ

いて実態分析の上、全学生を対象とした学力向上や学習意欲喚起策を検討いただきたい。

- ・ 全学統一、一般入試、共通テスト利用入試入学者にも、時間的な制約はあるものの、何らかの入学前教育を行うべきではないかと考える。これにより、より目白大学を知ることにつながり、大学での教育内容により興味をいだかせることができれば、早期退学者数の減少につながる可能性が期待される。
- ・ 入学前教育を受ける学生は多様性に富んでいる半面、教育内容は多様性に乏しい印象がある。高校基礎学力の向上、大学での教育内容の橋渡し、大学自体をよりよく知ること等、学生によってニーズは異なり、それに沿った形での入学前教育が望ましい。
- ・ 一般入試で入学する方フォロー体制については、より強化することが期待される。
- ・ 年内入試の学生は事前に交友関係を構築された中で、一般入試等の学生はコミュニティがない状態からスタートすることは、退学率にも大きく関係すると考える。
- ・ 学部・学科によっては、「入学前教育」の対象とならない受験生の割合が高い学部・学科もあり、入学前教育の有無のよって、入学後の学習に大きな差異が生まれにくいような取組みが必要である。
- ・ 看護学部の一般入試入学予定者の入学前教育における自宅学習の受講率が低い、入学後の1年生春GPAは一般型の方が高い。しかし4年生のGPAは推薦型が高い。この結果から読み取れる、専門性の高い学部での、入学前の意識＝「この職業に就きたい」という思いが強い学生は退学率が低く、学業成績も伸びている点に注目したい。
- ・ DVD教材による入学前教育は、入学後の授業でも使える内容が望ましい。現状が必要とする内容であるか、大学側と学生側で乖離があると考え。DVD教材では知識が主体の学習になるが、資料ベースの入学後も使えるツールでの学習の方が有用性は高い。(特に、総合型選抜の入学生のGPAが低いことへの改善策として、医療系の入学前教育は、授業に沿ったもの、授業に使える資料が良いのではないかと)
- ・ 一般選抜(全学部、共通テスト利用含める)においても、入学前教育か、入学早期の対応かフォローを行うことに期待する。
- ・ リハビリ系は高校生の段階では明確な職業意識がないことが多い。その対策として大学入学後の意識付けが重要である。
- ・ 入学前教育の重要なポイントである、「人脈づくり」や「アドミッション・ポリシーの理解促進」は、教員の負担軽減のためにも教職協働で行うことが望ましい。

## 6) 全体を通してのご意見

- ・ 大学として入学前教育が必要だという認識の上で、一般選抜による入学者は対象外であることは多少の疑問が生じる。入学前教育と同時に、初年次教育として、正規のカリキュラムの中でもディプロマ・ポリシーの目的を達成するのに必要な教育を行うよう配慮されることに期待する。
- ・ 新宿キャンパスの学部は、競合する大学が多く、今後さらなる少子化を迎えることから、厳しい状況に置かれていると予想する。特に一般入試やセンター利用入試において、目白大学が求める学生の確保が困難となる可能性があるため、今後、目白大学の独自色を作り上げることに期待する。
- ・ 看護師、リハビリ療法士という国家資格を目指すことを主たる目標としているため、一定の基礎学力に加え、医療人にふさわしい人格等も非常に重要である。その意味においては、学生確保のために、より推薦入学者の枠を広げていくことは重要である。
- ・ 大学が、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに重きを置き選考指針を定め、入学志願者を増やし、よりマッチ度の高い学生が入学するような仕組み、取組を今後も継続することに期待する。
- ・ 入学前に学生側がここで自分はどうような大学ライフを送れそうか、どう成長出来るかイ

メージが湧きやすく、いかに入学後のギャップを減らせるかが重要である。

- ・ 大学の名前に囚われず、「この大学でこれをやりたいから入学したい」と思われるような志願者を増やす活動に期待する。
- ・ 対面でのフォローアップは、総合型や推薦型の入試の学生には対応できているが、一般入試の学生には期間的な問題もあり対応しにくいいため、改善が必要である。
- ・ アドミッション・ポリシーを理解して受験する学生を重視するのであれば総合型選抜での合格者枠を増やす事は必然であり、趣旨に一貫性がある。特に専門性の高い学部（国家試験があるような）では、優秀な学生確保においては有効だと考える。
- ・ 入学前教育の教材はDVDよりもスマートフォンの活用や入学後も持ち込める紙媒体の教材の方が有用性は高いと考える。

## 6-2-2 論点2「入学後の状況分析」

### 1) 評価の視点①

入学後の状況から、入試は本学の求める学生を適切に見出せるものとなっていたか。	2.71点/4点
--	----------

#### 【評価できる点】

- ・ 入試としては、特段の欠点はないものと考えられる。
- ・ 推薦入試で入学した学生は、大学のことを良く理解し退学率も低く、成績も良好であり、目白大学が求める学生を見出している点は評価できる。
- ・ ご質問の答えに対しては、適切であると考え。退学はある一定の学生は、環境になじめないこと、メンタルが弱い学生も増加傾向にあること、安易な退学や休学が生ずるケースも否定できないことを加味すると退学率は高くないと考える。
- ・ 「入学したら違った」という学生がおそらく退学につながると考える。コロナ禍により、外国語学部の学生は留学チャンスがなくなり、まさに「やりたいことができなかった」数年であったが、この数字は教職員の方々の丁寧なご指導の賜物と感じる。「育てて送り出す」にふさわしいと考える。
- ・ 入試の仕組み（特に総合型）は今の目白大学にフィットした選考方法であり、退学率の低さからも適切である。総合型の入学者は入学前フォローも手厚くミスマッチのない状態で入学式を迎えられる体制が整っている。
- ・ 求める学生を適切に見出せるものになっている。
- ・ 入学後に教授と学生の面談も設けることで大学側と学生の意識をすり合わせる取組をされている点は評価できる。
- ・ 「この大学、学部で学びたい」と考え入学してきた学生は主体性があり学ぶための努力を継続することができるデータから感じる、また、良くも悪くも都内のマンモス大学のような大学ではないので、教員が学生を一人一人認識でき、良い距離感で関わっている点は評価に値する。
- ・ 当然ながら入試種別により差はあるが、全体的にアンケート等での結果では高い評価であるといえる。
- ・ 受験の方式により、目白大学が求める人材、そうでない入学者があることは、ある程度仕方がないと考え。
- ・ 「育てて送り出す」ミッションの基、退学率が低いことは、一人一人への手厚い教育や支援により、社会に出て頑張ることができる学生を輩出している。
- ・ 早期に退学を決める学生がある一定数いることは、その学生にとっては、ある意味良いことではないかと考える。

### 【改善を要する点】

- ・ 学業成績や中退者の存在は、その真の要因を精査・分析する必要がある。退学は、入学者選抜の方法そのものではなく、その背後にある学生の学力や意欲に由来するものであるかも知れない。すなわち、学生の個々の事情に配慮することが重要である。入試の方法に関わりなく、学生の学力の向上や意欲の喚起に努めることに期待する。
- ・ 総合型で入学した学生は、学力が低い傾向にあり、何らかの方法で基礎学力をより担保する必要があると考えられる。一般入試等で選抜された学生は、基礎学力の点では大学が求めるレベルに到達していると推測されるが、その一部の学生において大学の特色を十分に理解しておらず、退学者の増加につながっている可能性が推測される。
- ・ 退学予備軍、馴染めてない学生に向けて、教員だけの学生フォローではなく、職員や時には卒業生など多角的なフォローが必要だと考える。
- ・ 一般入試より大学への理解が深い学生であろう総合型の受験生も退学者が比較的多いことは意外であった。入学前教育を徹底し、入学後に教員と学生がコミュニケーションをとり学生に寄り添う必要があり、支援策に期待する。
- ・ 意識が高いだけでは、育っても「中の上程度」の学生にしか成長しないと考える。やはり入試における競争（一般入試など）を勝ち上がってくるような个体値の高い学生は、卒業後の進路でも活躍し、大学のブランド力の向上にも将来的につながっていく可能性が高いため、競争力のある学生確保にも注力することを期待する。

### 2) 全体を通してのご意見

- ・ さいたま岩槻キャンパスにおいては、看護学部は入試から卒業まで概ね良好にマネジメントされているのではないかと考える。保健医療学部においては、目白大学以外にも言えることではあるが、入学前に大学で何を学び、何をを目指すのかということ、より学生に啓蒙していく努力が必要である。
- ・ 学生のためにこんなに多くの方々が、全力で向き合ってくださっていることを知るよい機会になった。
- ・ 予想を上回る退学率の低さは大学全体の取組の成果であり、アドミッション・ポリシーやディプロマ・ポリシーを明示することでミスマッチを防ぎ、よりよい学生を選考し、大学としての魅力が増していると考えられる。
- ・ グラフでも結果が出ていたように、退学者は一般試験で入学した学生が多いことから、入学前のアドミッション・ポリシーの確認・理解が少なく、大学への理解が少ないことが要因であるとする、一般入試で入学者も入学前に大学との交流の場を持たせ、入学後の不安を解消しギャップを減らすことが大切である。
- ・ 退学理由において、ディプロマ・ポリシーの理解不足やアドミッション・ポリシーに合致していないなどの見解があるが、大半はその見解通りの可能性が高いと考えるが、現世代の学生にとっては、講義の分かり易さや教員との関係性、交友関係など、どれ一つとっても退学の理由になってしまうのではないかと考える。学生個人の能力もあるが、教員の人間性や講義の分かり易さも要因の一つと言えるのではないかと考える。教員が教員を評価する仕組み、または、学生が教員を評価する仕組みなどにより、教員が継続的にブラッシュアップする環境（システム作り）が必要だと考える。
- ・ 入試種別によって、傾向の違いがあることが、資料から分析することができる。その分析結果を踏まえて、どのように対応していくかが、今後の受験者数・入学者数の増加につながると考える。
- ・ 目白大学が目指す姿の実現に向けて、データの分析・活用・課題の抽出を適切に行い、改善にむけて取り組むことに期待する。

以上

## 7. 委員長総評

委員長 山本 眞一

通算4回目となる外部評価委員会において、第1回目から委員長を務めていますが、毎回適切なテーマを取り上げ、それについて議論し、評価して、外部に公表するということは客観性と妥当性の担保のために大変良いサイクルであると考えています。

大学にとって、一番の使命は「教育と研究」といわれていますように、その教育と研究を通じて、地域社会や産業界にも良い影響を及ぼしていくのが大学の務めです。その使命を果たすためには、大学はしっかりと教育して質の高い人材を卒業させることが何よりも大事なことです。そのために各大学は学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、その方針のもとで教育活動を行い、アドミッション・ポリシーに沿った入学者選抜を行っています。

アドミッション・ポリシーは、大学の理念や教育目的を達成するために大変重要な役割を果たすものです。一方で、大学経営の観点から言えば、十分な数の学生を確保することも重要です。この二つの重要事は「学生の質の確保」という点で矛盾するものであることは、他の多くの大学の事例で明らかになっています。18歳人口の減少が急速に進んでおり、2023年度の18歳人口は約110万人ですが、2023年の出生数はとうとう80万人を割り込んだという状況です。これは大学に影響しないわけがなく、質を確保するのか、量を確保するのかを大学として考え得ざるを得ない状況です。これは教学問題と経営問題が一緒になった形であり、今から約5年後の2030年から2040年代にかけて、大学へさらに大きな波が来ることは確実です。我々はそのための備えをしなければなりません。よって、現状で良いということはなく、2030年を念頭にさらにその先の近未来を眺めながら、両者のバランスを考慮しつつも学生の質的向上を重視するよう、今後も適切な入学者選抜を維持されるよう期待します。

また、近年の大学や学生を巡る社会状況の変化は著しく、これが大学教育のみならず高校教育を含めて、学生の学修環境の大きな変化をもたらしているものと思われます。このため、学生の学力担保と学習意欲の喚起に努めることが必要で、あらゆる手段を尽くして、このことに注力する必要があります。目白大学では以前から詳細かつ具体的内容のある冊子を作成するなど、学生の学修指導には力を入れているので、引き続きその体制を維持し発展を図ることにより、学生に寄り添いつつ、彼らの学習意欲を高め、学力を維持・向上させ、ひいては学生生活の充実を図るよう、教学運営の充実にますます努力されることを期待しております。

## 8. 2023年度（令和5年度）第4回外部評価委員会を実施して

副学長（総務担当）今野 裕之

目白大学の内部質保証に関する方針は、「本学関係者及び外部有識者からの意見を得て、客観性及び公平性が担保された点検・評価を行います。」と宣言しています。この方針に基づいて、本学は2020年度から外部評価委員会を設置し、外部のステークホルダー（本学関係者）及び有識者の方々による教学全般についての改善提案と改善結果の検証を実施しています。これまで、「教養教育（2020年度 第1回）」「学生支援（2021年度 第2回）」「ディプロマ・ポリシー（2022年度 第3回）」をテーマとして外部評価委員会を開催してきました。4回目となる2023年度は、本学の入学者の受け入れの方針（アドミッション・ポリシー＝AP）とAPに基づく入学者選抜・入学前教育をテーマとして設定しました。

本学の教育は、本学の3方針、すなわち「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」「入学者の受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）」に基づいて実施されています。目白大学の教育の質を保証するためには、3方針が適切に設定されているか、3方針に基づいて教育等が適切に実施されているか、教育の成果が挙げられているか等について検証した上で、必要な改善を継続的に実施する必要があります。2023年度の外部評価委員会は、このうちのアドミッション・ポリシー（以下APと略します。）に焦点を当て、外部評価委員会の皆様に①APは受験生に理解しやすいか、②APは多様な学生を受け入れるような内容になっているか、③APはディプロマ・ポリシーと整合性、一貫性があるか、④本学の入試は本学が求める学生を見出すものになっているか、⑤入学前教育は適切に行われているか、の5点を中心に評価と改善点について議論していただきました。

委員会当日の議論と事後評価を通して明らかになった本学の課題は、次のように要約できます。すなわち、(1) APを今以上に受験生に理解しやすいものにする必要があること、(2) 入学前教育を一層徹底・充実させる必要があること、の2点です。さらに委員長の山本眞一先生からは「2030年を念頭にさらにその先の近未来を眺めながら、(学生の質と量の) 両者のバランスを考慮しつつも学生の質的向上を重視するよう、今後も適切な入学者選抜を維持する」という長期的視点の重要性をご指摘いただきました。これらの課題・ご指摘は広く学内で共有した上で着実に今後の改善に生かします。

今後も、大学自身が充実した自己点検評価を行うとともに、評価の客観性と公平性を担保するため外部評価委員会の充実に努め、一層の教育改善・教育の質向上に取り組んで参ります。